

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

国内外科研修を終えて

東邦大学医療センター佐倉病院外科

北原 知晃

この度、日本臨床外科学会の国内外科研修制度を用いて、2019年10月21日から26日までの1週間で兵庫医科大学の炎症性腸疾患外科にて研修をさせていただきました。このような貴重な機会をいただきましたことを、日本臨床外科学会会長の跡見裕先生、国内外科研修委員会委員長の高山忠利先生をはじめとしました皆様に心より御礼申し上げます。

当院は千葉県にある東邦大学の付属病院ですが、以前より内科を中心として炎症性腸疾患の治療に積極的に取り組んできました。炎症性腸疾患の患者数は年々増え続けており、内科的治療の向上により長期に安定する症例も増えている一方で、治療抵抗性で手術が必要となる症例も少なからず認められます。また、長期罹患に伴い癌化する症例も増えており、今後も炎症性腸疾患に対する手術はますます増加していくものと考えられています。

当院ではこれまで、特に潰瘍性大腸炎に対する手術として年間10数例程度の症例がありました。しかし、今年度よりIBDセンターが設立されたこともあり、周囲の医療機関からの転院搬送が増えている現状にあります。それに伴い当院における炎症性腸疾患症例に対する手術症例は今後さらに増えることが予想されます。今後の診療を行っていくためにも、外部での研修が必要と考え、全国でも有数のIBDセンターを持つ兵庫医科大学を研修先として選択させていただきました。

今回は、潰瘍性大腸炎に対する手術を中心に見学させていただきました。兵庫医科大学の炎症性腸疾患外科は、潰瘍性大腸炎に対する手術を年間にして当院の20倍以上も行っていると認識していましたが、その症例数を医局員がわずか8人と、かなりの少人数で診療していたことに驚かされました。近隣施設だけでなく、県外からも症例が紹介されてくるとのことでした。内科外科のカンファレンスにも参加させていただきましたが、両科の連携がうまく取れているからこそ、少人数ながらこれだけたくさんの症例を診ていけるのだと感じました。

1週間の研修では潰瘍性大腸炎を予定手術で3例、準緊急手術で1例見学させていただきました。兵庫医科大学では、2018年から潰瘍性大腸炎に対する手術を腹腔鏡で行っているとのことでした。当院でも腹腔鏡下に手術が施行されていることもあり、当院との手術手順の違いについて大変参考になりました。ポートの位置に関しては、傷を少なくするために臍部にカメラポートと5mmポートを挿入して行っていました。患者さんに配慮する姿勢に感銘を受けました。手術の際には何度かスコピストを務めさせていただきましたが、不慣れなために先生方に大変ご迷惑をおかけしました。間膜処理は腹腔外操作で行われていました。当院では全て腹腔内で切離していくためにかなり時間を取られていた部分でしたが、結腸の外側がきちんと剥離された状態であれば、腹腔外で問題なく切離可能と知りました。今回の手術では患者さんの体型もそれぞれで、やせ型から内臓脂肪型まで体験させていただきました。内臓脂肪が多かった症例の手術では脂肪も脆く、当院であればかなり視野展開に苦勞する症例だと思いましたが、適度な体位変換と先生方のうまい連携で大開腹することなく施行できたことに感激しました。

吻合に関しては、IAAを基本とされていました。要の部分で、小腸を肛門まで届かせるために十二指腸をしっかりと落とし、また、小腸間膜の開窓や処理する血管に関しては複数の目で十分に議論されながら行われていました。無理に伸ばして血管を損傷させないように、適宜間膜補強を行っていることも参

考になりました。それでも肛門まで届かず、IACAに変更となった症例もありました。IAAができそうであるとか、肛門と実際に吻合したときにこれは大丈夫そうだとかなどといった印象は、教科書ではなかなか伝わってこない部分であり、これらが見学できただけでも研修をした価値があったと感じました。肛門からの操作では池内教授、内野准教授の手術を見学させていただきました。使用するデバイスや pouch と固定する針数など、普段の診療では肛門操作自体なかなか見ることがないこともあり、大変勉強になりました。

潰瘍性大腸炎手術の術後には、当院同様 outlet obstruction 症例が多いようでした。その予防策として stoma 位置の工夫をするなど、さまざまな対策が練られており、こちらも今後の参考になりました。

手術が無い日は学生に対する講義も見学させていただきました。実臨床だけではなく、学生への教育も積極的に行っている姿勢に感動したとともに、兵庫医科大学の学生の理解度の高さにも驚かされました。

1週間と短い期間でしたが、先生方の計らいもあり、かなり充実した時間を過ごさせていただきました。上述のように同じ腹腔鏡手術でも施設間で相違点があり、教科書を読んでいるだけでは気づかなかったことが、他施設への研修・見学で初めて気づくこともある、と改めて感じました。今回の研修で得られたことを、今後の診療に役立たせることができればと思います。

最後に、今回受け入れていただいた兵庫医科大学炎症性腸疾患外科の池内浩基教授をはじめとしたスタッフの皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。